

講演：「Minoritataj lingvoj kaj minoritatoj kaj mi 少数言語と少数民族と私 ～ブラジル・エスペランチストからの報告～」（仮題）

講師紹介

マルセロ・ユウジ・ヒモロさん（28歳。現在、札幌市在住）



日系ブラジル人。北海道大学の調和系工学研究室で起業した会社の中で働いているソフトウェア開発者。2013年にサンパウロ大学の情報工学科を卒業。現在は（南フランスの）モンペリエ第三大学で（地域語の）オック語の最終学年生。また、遠隔学習でスペイン国立大学で自然言語からの言語学／コンピュータ処理の学科も卒業予定。

【講師からのメッセージ】私の父方の親戚は、北海道苫前町と秋田県三種町と秋田県能代市の出身です。母方の親戚は、北海道余市町と秋田県能代市の出身です。祖父母の母語は、日本語の東北弁ですが、ブラジルでの複雑な事情と戦争中での抑圧のため、祖父母は私の両親に日本語を教えず、標準日本語も習得していませんでした。そのため、私の両親は東北日本についての詳しい知識はないので、私の母語はブラジル・ポルトガル語となっています。

私は子供の時から、いつも言語に興味を持っていて、北海道北広島市の親戚には大きな影響を受けました。その親戚とコミュニケーションを取るために、その親戚の中の数人が習得しているスペイン語と英語を学び、最終的に日本語を学びました。今、北広島市の親戚とは日本語で会話しています。

2001年には少数言語に興味を持ち、その数年後に人工語に興味を持ちました。少数民族と関係する知人の多くの方がエスペランチストであったため、2008年からエスペラントを学びましたが、色々な理由で中断しました。2013年の冬休みに、また言語を学ぶことにしました。私は、インターネットで言語を使っている世代に属しており、（ネットでの学習講座の）Lernu!(レルヌ!)でエスペラントを学び、フィリピン人の言語援助をしてくれる人がいます。

ブラジルで育ちながら、子供の時分には、いつも自分の日本人らしさを否定していました。私は地域の多数派の文化に合わせていこうと試みましたが無駄でした。一方、私も自分に日本を感じませんでした。少年時代には、私は少数者の言葉の意味を全く知りませんでした。しかし、色々な少数民族を知り始めた後には、少数者としての自分に出会いました。ブラジルでの差別を話すことはタブーです。黒人は既に長い間差別と闘ってきましたが、最近までアジア人はいつも沈黙し、現状について自己満足に陥っていました。グローバル化し、変化している世界において、アイデンティティーはますます複雑となり、そのテーマを話すことは、私にとって重要になります。

エスペラント：言語を異にする民族間の「橋渡し」のために考案された国際共通補助語です。この言語が、「じゅうぶん」に実用できる言語であることを、講師のユウジさんが実証してくれます。

とき・ところ： 2017年10月22日（日）9：00～12：00

かでの 2.7（中央区北2条西7丁目）1020会議室

入場無料！ 事前申し込み不要！（直接会場へお越しください）

お問合せは：北海道エスペラント連盟

011-790-8056（後藤）または hokkaido_esp_ligo@yahoo.co.jp（横山）までどうぞ。

エスペラント 北海道

検索



ユウジさんからのメッセージの原文です。

Saluton. Mi nomiĝas Yuji, mi estas 28 jaraĝa kaj estas japana brazilano. Mi nune loĝas en Sapporo kaj laboras kiel softvara disvolvisto en ekfirmao de la laboratorio de Inĝenierio de Harmoniaj Sistemoj de la Hokkajda Universitato. Mi diplomigis pri Komputiko de la Universitato de São Paulo en 2013. Nune, mi estas lastjara studento pri la okcitana lingvo en la Universitato de Montpeljero III kaj ankaŭ magistriĝas pri Lingvistiko/Komputila Prilaboro de Naturaj Lingvoj en la Hispana Nacia Universitato de Jedistanca Edukado.

こんにちは。私は、ユウジという名前で、28歳で、日系ブラジル人です。現在、札幌市に住んでいて、北海道大学の調和系工学研究室で起業した会社の中でソフトウェア開発者として働いています。2013年にサンパウロ大学の情報工学科を卒業しました。現在は(南フランスの)モンペリエ第三大学で(少数言語の)オック語の最終学年生です。また、遠隔学習でスペイン国立大学で自然言語からの言語学/コンピュータ処理の学科も卒業します。

Mia patra familio eldevenas el la urbo Tomamae (Hokkajdo) kaj la urboj Mitane kaj Noŝiro (Akita). Mia patrino, el la urbo Jōjō (Hokkajdo) kaj Noŝiro (Akita). La denaska lingvo de miaj geavoj estis la nordorienta japana, sed pro sia komplika situacio en Brazilo kaj la subpremo dum la milito, ili nek instruis la japanan al miaj gepatroj nek majstris la norman japanan. Konsekvence, miaj gepatroj nur havas pasivajn konojn pri la nordorienta japana, kaj pro tial mia denaska lingvo estas la brazila portugala.

私の父方の親戚は、苫前町(北海道)と三種町と能代市(秋田県)の出身です。母方の親戚は、余市町(北海道)と能代市(秋田県)の出身です。祖父母の母語は、日本語の東北弁ですが、ブラジルでの複雑な事情と戦争中の抑圧のため、彼らは私の両親に日本語を教えず、標準日本語も習得していませんでした。そのため、私の両親は東北日本についての詳しい知識はないので、私の母語はブラジル・ポルトガル語です。

De kiam mi estis infano, mi ĉiam interesiĝis pri lingvoj. La plej grava influo ja estis miaj parencoj en la urbo Kitahiroŝima. Pro la ideo interkomuniki kun ili, dum mia infaneco kaj plenkreskiĝo, mi lernis la hispanan kaj la anglan (du lingvojn, kiujn kelkaj el ili majstris), kaj finfine la japanan. Hodiaŭe, kvankam, ni nur interparolas japane.

私は子供の時から、いつも言語に興味を持っていました。最も大きな影響は、北広島市の親戚でした。こども時代に始まる成長の年代に、彼らと話し合えるようになろうと思ひ、その親戚の中の数人が習得しているスペイン語と英語を学び、最終的に日本語を学びました。今、北広島市の親戚とは日本語で会話しています。

En 2001, mi ekinteresiĝis pri minoritataj lingvoj. Kelkaj jaroj poste, mi ekinteresiĝis pri artefaritaj lingvoj. Ĉar multaj el miaj minoritat-rilataj kontaktoj estis geesperantistoj, mi eklernis Esperanton en 2008, sed tuj haltis pro diversaj kialoj. Dum miaj vinteraj ferioj en 2013, mi decidis lerni definitive la lingvon. Mi alpartenas al la generacio kiu esperantiĝis kaj uzas la lingvon ĉefe interrete. Mi lernis E-on pere de Lernu! kaj havis lingvohelpanto el Filipinoj.

2001年に私は少数言語に興味を持ちました。数年後に私は人工語に興味を持ちました。少数民族と関係する知人の多くの人々がエスペランチストであったため、2008年にエスペラントを学び始めました。しかし、色々な理由ですぐに中断しました。2013年の冬休みに私は最終的に言語を学ぶことを決めました。私は、エスペラントをして、主にインターネットで言語を使っている世代に属しています。私は(ネットでの学習講座)Lernu!でエスペラントを学び、フィリピン人の言語援助してくれる人がいます。

Kreskante en Brazilo, dum mia infaneco mi ĉiam neis mian japanecon. Mi provis sensukcese konformiĝi kun la plimulta loka kulturo. Aliflanke, mi ankaŭ ne sentas min japano. Tiam mi tute ne sciis la signifon de la vorto minoritato, sed post kiam mi ekkonis pri diversaj minoritataj popoloj, mi ekrekonis min kiel minoritato. Paroli pri diskriminacio en Brazilo estas tabuo. Nigruloj jam delonge batalas kontraŭ diskriminacio, sed ĝis lastatempe azianoj ĉiam estis silentaj kaj memkontentaj pri tio. En tutmondiĝanta kaj ŝanĝanta mondo, identecoj iĝas pli kaj pli kompleksaj, kaj laŭ mi, ja gravas paroli pri tiu temo.

ブラジルで育ちながら、私の子供時代には、いつも自分の日本人らしさを否定していました。私は地域の多数派の文化に合わせていこうと試みましたが無駄でした。一方、私も自分に日本を感じません。少年時代には、私は少数者の言葉の意味を全く知りませんでした。しかし、色々な少数民族を知り始めた後には、少数者としての自分に出会いました。ブラジルでの差別を話すことはタブーです。黒人は既に長い間差別と闘ってきましたが、最近までアジア人はいつも沈黙し、現状について自己満足に陥っていました。グローバル化し、変化している世界において、アイデンティティーは段々と複雑となり、私にとって、そのテーマを話すことは重要になります。

Amike,
親愛なるあなたへ